

令和元年7月1日に思う

3,459。これは何の数字でしょう。

今年もすでに空模様が気になる季節になっています。5月には鹿児島県屋久島で、大雨による土砂くずれにより一時300人以上の登山者が孤立するという被害が発生しました。昨年も当コラムで記述したように“異常気象”はもはや“日常の出来ごと”であると認識し、日ごろより防災・減災の意識を高め、そのためにも準備を心がけることが賢明でしょう。

ここで冒頭の数字です。これは、先月東京で行われた「土砂災害の特徴と砂防」と題する講演会で紹介された、昨年1年間の土砂災害発生件数です。集計を開始した昭和57年以降、最多件数を記録したとのこと。ちなみに年間平均発生件数は1,015件で、例年の約3.4倍にのぼっています。

さらにこの講演会では、こうした中で積極的な避難行動により「命を守った」とする事例も紹介されました。東広島市黒瀬町<sup>ようこく</sup>洋国団地では、土石流が発生し、集落内の20%の家屋が全半壊、40%の家屋が床下浸水となりながらも、人的被害はゼロでありました。普段から防災マップの確認や避難訓練を実施し、となり近所への「声かけ」の習慣が身に付いており、それらがすばやい避難行動に結びついたようです。

この事例からも、住民一人ひとりの「自主防災」の意識がいかに重要かということがうかがえます。伊勢湾台風襲来から60年となる今年、私たちは今一度自然の恐ろしさを認識し、日ごろから“いざ”という時の準備を行うべきではないでしょうか。もちろんこの時期、熱中症にもご用心を…